

学生主体による「ポスターセッション」の活用



中村学園大学

学校
ホーム
ページ



この事例のポイント

- ・ 保育実習後の学びをテーマにした学生主体のポスターセッションを、主に現場の管理職者・実習指導担当者を招いて実施。
- ・ 学生の「実習での学び」を可視化し、現場の専門職からの建設的な批判と対話を通じて、学生の気づきと学びの深まりを促進。
- ・ 養成校の教員と現場の指導者が、学生の学びを介在軸として対話することで、実習指導や養成教育のあり方について協働的に考える基盤を構築。

この取組を行った背景や目的

<背景；解決したい課題>

- ・ 現場の指導者が提供する学生の評価は、養成校の授業改善に活かされているが、学生が実習で何を学び、その結果大学がどのような指導を行っているかという点が現場側へフィードバックされていない実態もある。
- ・ 現場の先生方も実習指導に対して多様な考えを持っているが、養成校と直接意見交換し、自園における実習指導にかかる学びを深める機会が少ない状況にあった。

<目的>

- ◎養成校における学びの積み重ねを共有し、共に養成教育を考える場としてのポスターセッション
- ①学生の学びの深化（当事者意識の醸成）
実習で得た気づきや疑問を形（ポスター）にし現職の先生方からの様々な問いに答えることで、自身の学びを再考し、保育者としての当事者意識を持つ機会とする。
- ②養成校の教育公開と透明性確保
養成校の事後指導の形や学生の成長の実態を現場に公開し、実習指導に対する相互理解を促進する。
- ③実習指導・養成教育の共同創造
現場指導者と教員が、学生の学びをテーマに建設的な議論を行うことで、「実習指導は養成校教員だけでも、現場の先生だけでも成立しない」という共通認識を醸成し、協働して実習指導や養成教育の底上げを図る。

実施した内容 保育者養成と現場の協働による教育改善事例 学生主体による「ポスターセッション」の活用

① 継続的な取り組みと学びの連動

- ▷継続期間：約4年前から継続的に実施。
- ▷実習と連動したテーマ設定: 3年次の「保育実習Ⅰ」でグループ分けとテーマ設定を行い、学内指導を実施。4年次の「保育実習Ⅱ」では、同じテーマを3年次のグループワークで決めたテーマを踏まえつつ、さらにグループ内で共有したテーマのもと、学生が自らの実習を深化させることを目標に実習へ向かう。
- ▷時間外での主体的な準備: ポスターセッションに向けた準備は、正課の授業時間だけでなく、学生たちが自主的に各自の時間や都合を持ち寄り、スケジュールを合わせて進める「時間外での取り組み」も重視している。

② ポスター形式と対話の設計

- ▷異学年の交流: 4年生が発表を行い、3年生は見学に来る。後輩が先輩の姿を見て学び、「次は自分たちがやる」という意識を養う異学年交流の機会ともなっている。

▷デジタルとアナログの融合: 令和7年度については、3年次はデジタルデータで作成し、4年次はアナログ(手作り)のポスターを作成する。保育現場では両方の手法が必要なためであり、アナログポスターは、園の先生との間で対話が「相談的」に行われる良さがある。

▷対話の具体的な内容: 現場の先生からは、「子どもの主体って、先生方(実習生である学生たちのこと)はどのようなものとして捉えていますか?」といった、深い問いかけが行われる場合もあり、学生がその場で考え、応答することで学びを深めている。

③ 現場指導者とのフィードバック体制

▷セッション後の講話会: ポスターセッション終了後、参加してくれた現場の先生方を対象に別途「懇話会」の場を設け、現場の先生同士のグループセッション等を実施。

▷建設的な議論の場: 大学教員もその場に加わり、養成教育に対する建設的で批判的な意見を出してもらう。これは、養成校と保育現場が率直に話し合う貴重な機会となっている。



実践するためのヒント

① 学生の主体性を重視した運営

▷教員の役割はアドバイザー: 教員は「アドバイザー」としてのスタンスを徹底し、学生が自ら考えて行動する機会としている。

▷服装の自己判断: 教員側からスーツなど特定の服装を指示せず、発表にふさわしい服装を学生自身が考え、TPO(時・場所・場合)に応じて考える機会として、当事者意識を促す。

▷発表ツールの自己選択: スマホや紙ベースなど、発表に使用する媒体も学生が主体的に選択できるように。

② 現場指導者との協働意識の明確化

▷「協働」の形を明示: 管理職者を始め、保育現場の主に実習を指導されている先生に大学へ来てもらい、学生との学び合いや対話に参加してもらうことで、「養成校が指導し、実務的なところは現場にお世話になる」という関係から、「共に実習指導(養成)を考えていく」という協働のスタンスに。

▷実習指導の主体を学生に: 実習指導の主体を「学生」と位置づけ、「学生から何を学べるか」という視点を現場の先生方と共有し当事者意識の醸成に繋げる。

③ 継続的な改善と教員側の学び

▷異学年交流の意識的な活用: 異学年(3年と4年)での学び合いを重要な要因と捉え、3年生に見学させることで、学びの積み重なりや、先輩の姿から自分たちの課題を認識する機会を提供。

▷学生と教員の対話時間の確保: 学生と養成校の教員が、現場の先生とのやり取りとは別に、個別に深く関わる時間を設けることが大切。